

皺

1

「遅刻、遅刻〜」

老人の笑顔は美しかった。

「遅刻、遅刻〜」

その老人はオーバル型ナースステーションの周りを只管に駆けている。

それが、彼の日課であり。

それが、彼の全てだった。

老人は目が醒めると歯を磨き、皺の酷い寝間着から背広に着替えナースステーションへ向かう。

「遅刻、遅刻〜」

そして、律儀にも決まった休憩時間、食事を挟みつつ午後九時までそれを繰り返し、午後十時には再び寝間着に着替えて、睡眠した。

老人は痴呆症だった。

痴呆症という明確なカテゴライズからは多少逸しているが、それは問題ではない。

肝心な事なのだが、彼を痴呆症と呼んで、それを否定する者が誰も居ないだけなのだ。

「遅刻、遅刻〜」

老人の下に男がやって来る。

背の高い、どこか影のある男だった。

「遅刻、遅刻〜」

男は、老人を見て苦虫を噛んだような顔になる。

「ちっ」

男は小さく舌を打った。

そして、三十云秒に一度だけ会える実の父を十回ほど睨みつけては、舌打ちをして帰った。

それが、彼の日課であり。
それが、彼の全てだった。

2

その公園は男の自宅から二駅ほどの所にある。
生い茂った森林の所為か、墓地とも、神社とも言
えるような場所だった。

男は最近、毎朝そこへ通っている。

「……」

他意はなく、理由は職を失ったからである。
娘にはまだ、その事を告げていない。

特等席となりつつあるベンチに腰をかけると、男
は一つ、大きな溜息を吐いた。

今日もまた、男は職務を全うする。

つまりは、夕方までここにいただけなのだが。
男にとって、それと前職の違いはあまり無い。

少しだけ立ち上がって、尻を刺激する落ち葉を払
った後。

男は、一人呟いた。

「親父……」

何もない公園には、舞う落ち葉達の衝突と、男の
呟きだけがあった。

男は薄汚れたベンチに身体を預けると。

父との思い出を浮かべるような表情をした。

男は幸せな生活を送っていた。

幼少の家庭環境が窮屈だった訳でもなく、頭が悪
い訳でもなかった。

ただ、男は——どうしてかは分からないが——狡
猾だった。

幼い頃から偽善的だったのだ。

例えば男は、友人からの誘いを断った事は無く、

また頼みも全てこなしした。

それは、母親だろうが教師だろうが、上司だろうが変わらなかつた。

男は誰かから頼み事をされると断れない性質を持つていた。

例え後に大事な予定があろうが、気分が悪く吐きそうな時でさえ、男は頼み事を笑顔でこなしで言った。

「僕なら大丈夫。それよりも、良かったね」

男の行動には計算が含まれていた。

男は「誠実な行動の後には必ず見返りがある」と理解していた。

例え即日で見返りが無かろうが、長い付き合いをしていく上では必ず生じるであろう。

また、最低限パイプを保てるだけで十分な見返りであると言えよう。

男は、——狡猾な男であるが故に——幼い頃からその重大性に気づいていたのだ。

だからこそ、男は誰にも奥に秘めた本音、つまりは計算を打ち明ける事は無かつた。

男は、それで幸せだった。

自分の行いを「偽善的」であると知り、男は一時期苦悩した。

だから高校二年の春、男は一度だけ他人の頼みを断つた。

それは、父親からの頼みだった。

男の父親は臨床の精神科医だった。

父親はその日、朝は問診、昼からは学会で論文発表があつた。

だが、あろう事か、父親は昼に発表すべく論文を